腹全体から甘い熱が生まれてエリーを苛み、かきまわされるたびに声をたてて腰を蠢かせる。自分が自分でなくなるような不安に襲われながら、それでもエリーは甘い波に自ら呑まれていった。

「……あ、っ」

溺れる者が救いを求めるように、エリーは側にあった白い脚をつかんだ。

「え、いや、いやですっ……！」

それは、エリーの痴態を見るために膝立ちになっていた和羽の太腿だった。

不意の攻撃にバランスを崩した和羽は、そのままエリーの顔の上に腰をおろしてしまった。

「ご、ごめんなさ……アヒィ！」

ヌルリとしたモノにヒダを舐められ、和羽は甲高い嬌声をあげる。エリーはあわてて腰をあげようとした和羽の尻をつかみ、彼女の股間へと舌を伸ばしていた。

「や、やっ、やあんっ！　や、先輩、やめっ……」

「あなたも……一緒に……ひぅっ！　す、するんで……しょ」

和羽が逃れようと腰を振るが、それはより悦びを生みだす効果でしかなかった。

元々発情した肢体は悦楽を求め、疼いている。そんなときに女の急所を押さえられ

た和羽に、逃げる道などあるはずがなかった。
「せんぱ、せんぱぁい……っ！　きゃうぅ……ッ！」
だが、攻守逆転というわけではなかった。和羽が悦びに震えるたび、エリーの肢体にも悦びの波紋が走り、それは康晴の悦びに変わっていた。
康晴は三人を繋ぐように、和羽の顔を引き寄せ、唇を重ねる。激しい抽送の揺れが和羽から伝わるのが嬉しく、康晴はさらに激しく腰を振るった。
「あ、あ、あっ……」
エリーの肢体はコブクロへと射精させるため、女の深淵へ康晴を導く。
必死に歯を食いしばっても、肉茎を包む痺れは収まる様子がない。
康晴は牡の本能に従うように、よりいっそう激しくエリーを攻めたてた。
「あふ……あぁんっ！　あんっ、きゃぅ……っ！」
康晴の抽送に合わせて愛液を混ぜる音が響き、突き動かされた豊満な乳房が揺れる。
康晴はよりいっそうの快楽のため、エリーの肉壺をぐちゃぐちゃにかき混ぜた。
「あひ……ひはっ……あぁぅ！」
エリーの肢体は刺激を求め、腰をスイングするように浮かせる。もちろんエリーだけではない。康晴の体も意識の制御を失っていた。

エリーは甘い陶酔感を舌で和羽に分け与えながら、求めつづける。
怒濤の心地よさが、繋がっている部位から脳へと駆け昇っていく。
「……らっ、らめっ……！」
エリーの身体が、痙攣を起こしたようにビクンビクンと小刻みに震えだす。そしてその震えは和羽にも伝わり、突き抜けるような悦楽が彼女を激しく打ちのめした。
三人に流れるリズムが一つとなり、康晴を起点に淫らに巡回する。
「うぁぅッ！」
激しい抽送に声をあげたエリーに、康晴はさらに牡端子を奥に打ちこんだ。
腰が勢いよくぶつかり、エリーの体に波紋が走る。
波紋がモノを通り、康晴の脳をじりじりと焦がしていく。
モノに集まる快感を増幅するかのように、康晴はただ腰を振りつづけた。
「……あぁあぁっっ!!」
和羽に乳房をつかまれたエリーが激しく肢体を震わせ、膣を収縮させる。
牝芯が生みだす快楽の波は激しく康晴を攻めたて、せきとめていた体液を搾り取るように律動する。
「で、出るッ！」

康晴の腰に溜まっていた熱い欲望が、制御を振りきって一気に流れだす。精いっぱいこらえようとする肉茎は、小便を途中で切ったときのような尿道の熱さに灼かれ、ひとまわり太くなった。

「ふ、ふとっ……あ、あ……あぁぁ――――――ッッッ!!」

致命傷を与える凶器が到来する予感に、エリーのすべてが歓喜に染まる。

膣の脈動はよりいっそう激しく、康晴を奥へ奥へと導く。

「うっっっ!!」

こらえきれず、康晴の凶器が胎内で大きく跳ねた。

全身が焼けるような衝動とともに、康晴は女の奥へと熱いエキスを注ぎこんだ。

「……あ、ひ……ぃ……」

絶頂に意識を奪われながら、それでもエリーは康晴を貪るように身を震わせる。

そんな彼女に愛を感じながら、康晴は次々と精液を注ぎこむ。

勢いよく抽送したため、最後は抜けて腹の上に精子が飛び散る。

「……ぁぅ」

エリーの絶頂の余波を受けた和羽が、脱力してエリーの上に倒れこむ。シックスナインの格好で、彼女は混合液が溢れでる股間へと顔を埋めた。